

意見

宮本 久雄

情報が氾濫する現代にあっては、情報化の津波にのまれて自己の言語行為（parole）が奪われ、自己をペルソナたらしめる（内的）言語空間を喪ってしまう。いわば情報の大衆化時代の現出であり、皆人が結局同次元の似たようなことを言うはめに陥っている。

他方である精神分析医の深刻な話しがある。現今患者との対話に入ると、それまで学んできた分析理論一切をすてないと全く心の交流はできないと痛切に感ずる。裸の自分は余りにみすぼらしく、患者として来る人に結局何を語りうるのかと思うと絶望するしかない。ついには自分のアイデンティティさえ分らなくなるという。そうなるのは言語の伝達不可能性によるのか。結局心のことについては、神秘主義をもち出すまでもなく、本来心を開くはずの言葉が何も伝ええないという逆説が言語そのものに伏在しているのであろう。

一方で情報の氾濫、他方で交流の疎外が今をおおい尽している。

もう少し世界史的視点で観察してみれば、上述の事態は「アウシュヴィッツ以後」といわれる。すなわち、それは国家権力やそのイデオロギーなど全体主義が、唯一回個を自らの自同的システムに還元して皆のっぺりと同じくしてしまう歴史的精神的傾向の一掃結でもあろう。と同時に、それは個々のペルソナを、絶滅収容所が象徴的にそうしたように抹殺し、人間像をバラバラに解体してしまった事態でもあろう。そうした全体主義的還元と交わりの断絶は、ソクラテスやイエスの刑死に思いを潜めれば納得のゆくことであらう。

問題は現代にあって地球規模で、共同体的交わりがゲゼルシャフト化し、さらに全体主義化されると共に、キリスト教思潮に生まれたペルソナ・個といわれる人間像の解体・消滅が密かに壊滅的に進行しているかのようなのである。

如上の状況を自覚され、今回のシンポジウムで各提題者の方々が展望を披こうとされていたようにみえる。岩田氏は、全体主義的世界に対し真の公と個の関係を示し、稲垣氏はやはり共通善を支えるペルソナのいわば身体である「徳」のことを、さらに

清水氏は臨床の現場から、断絶が交わりに転換するコイノーニアの実験とその言語表現の可能性を説かれたと思う。各氏は「アウシュヴィッツ以後」の人の他者との、否、さらに自己との交流が絶望視され問われそして問われつつある今世紀の課題と展望とを言挙げされたのである。一方でコイノーニア、正義、共通善など西欧哲学がつかかってきたテーマがあり、その根底にベルソナの再構築の問題がある。

以上を念頭において筆者がもし教父・中世哲学が現代に何の展望を示しうるか、と問うならば、一つは観想（contemplatio）そして靈的共同体が考えられよう。すなわち、ベルソナの成立に関していえば、超越者（神など）に心を開き、彼と共に在る観想は一つの対話的な内的空間（たとえば祈り）を形成し、その内的空間がベルソナ成立の要件となろう。そのとき人の親子、友人、師、夫婦などみな超越者に次ぐ第二の友人・対話相手となる。その意味でそうした内的空間は独我論的世界の構築ではなく、自由な他者への開けとなりうる。他方で国家や民族も含め地縁、血縁のないかなるものにも距離をもちうる内的自由が確立され、これらのベルソナの交わりの地平が、たとえそれがいかに小さな交わりであれ、拓けてくる。恐らくそこからしか、公・正義・共通善ということを考え実現する働きが生まれないのであろう。

こうした contemplatio に基づき、一切の社会学的組織論や心理学的人間関係論および政治理念を相対化して、それらをも生かしつつ超越に開かれた共同体実現を夢みた一つの形が、修道院制であったのかもしれないし、その試みは結局失敗したのかもしれない。しかしそもそもプラトンの『国家』に登場する観想の哲人王が、善のアイデアを土台とする共同体を人々に示そうとしたとき殺される運命にあったように、観想的共同体ということは最もリアルな現実として哲学の始まり以来今日まで追求され、挫折してゆく。しかし、そこに「にも拘らず」と言い立て続ける人々の多くをわれわれは中世哲学者の系譜に今日見出すことができる以上、われわれの問いと思索と実践は徒や疎かのこと（言・事）ではない、といえよう。
